



自分自身で考え、 挑戦し続けることの大切さ

おおもと まもる
大元 守

石巻市 建設技術管理監

1949年生まれ。福島県出身。日本大学工学部卒業後、1972年日本工営株式会社入社。2006年交通運輸事業部長、2010年技術本部技師長を経て、2014年3月退職。その後、2014年4月より現職。また、2008年から約7年間公益社団法人日本技術士会 防災支援委員会委員長を務める。

インタビュー日：2015年10月1日

聞き手：渡辺泰孝，玄間千映子，黒田武史

設計・計画から維持管理・防災へ

これまでの経歴を聞かせてください

学生の頃は交通工学を専攻していましたが、当時の日本工営には、交通計画の部門がなく、最初は設計業務に従事しました。新入社員の秋頃から、日本道路公団の中央道諏訪湖サービスエリアの詳細設計を担当しました。当時の日本道路公団には、自ら設計図を作成した工事長等がおられ、自分の設計成果を直接工事長から指導を受けたことが大変勉強になり印象に残っています。設計要領を渡され、どうやってサービスエリアの線形を決めればいいのか四苦八苦しながら業務を進めました。入社して最初の職場ですが、仕事を任せて貰えたことが自分自身の力になったと思います。

30歳代になってから、計画業務に従事し、交通量推計や道路計

画に取り組みました。当時は、日本工営に交通計画分野の蓄積が少なく、協力会社の人と手さぐりで、取り組みました。社内では計算センターの協力を得て、交通センサデータをを用いた混雑度・交通量図作成の研究開発を行いました。その成果を活用し、神奈川県、静岡県、群馬県等の道路網計画業務を受注しました。

40歳代半ばから50歳代にかけて、維持管理や防災に関する業務に従事するようになりました。三次医療から見た道路整備計画では、山間部の雨量規制で通行止めになる道路について、どのように優先順位を付けて整備するか等の検討を行いました。優先順位の指標をどのように設定するか等を考察し提案しました。

50歳代は、人事管理や利益管理等が主体となり、現場業務へのこだわりから60歳を目前に日本工

営を週1日の非常勤にしてもらい、週4日は長野県の(株)地域総合計画に勤務しました。長野県では県全域の買い物難民の調査に従事し、高齢化やスーパーの郊外化で買い物が困難になった高齢者を直接訪ねて買い物の実態を聞いて回りました。買い物困難エリアをフードデザートマップで示し、買い物難民への適応ビジネス等を提案しました。

現在の業務に従事するきっかけは？

2011年3月の東日本大震災がきっかけです。2008年6月から日本技術士会の防災支援委員会委員長に就任していましたが、福島県出身でもあり、震災復興のため、2011年7月から福島県の(株)ふたばに移り、福島沿岸部を拠点として復興計画づくりを支援しました。復興計画では、住民意見集約のために、防災支援委員会として地

委員会からのメッセージ

大元守さんは、日本工営(株)に入社後、持ち前のバイタリティーで同社において多様な分野を切り拓かれました。60歳を過ぎてからは企業という殻を破ってご自身の道を切り拓かれ、今は終わりのない技術者人生の途中駅として石巻市で建設技術管理監に就任されています。そんな大元さんならではの「技術者人生観」をお聞きたいと考えました。

区ワークショップを立ち上げました。復興計画案での住民の賛成や反対意見をまとめました。復興計画では住民の総意を反映することが大切と痛感しました。

防災支援委員会では被災地支援人材データベース(約 200 名)を構築し、復興庁に紹介しました。その後、復興庁と被災地を支援する仕組みづくりにも参画しました。そういった縁から、復興庁を通じて、石巻市の震災復旧・復興事業を担う建設技術管理監の就任要請を受けました。現在は、主に半島部の防災集団移転促進事業の全体マネジメントを行っています。

自分で考え、挑戦すること

仕事を進める上で大切なことは？

まずは、自分の基礎となる技術を確立することが大切だと思います。そのためには、自分自身で考えること、そして自分自身の手を動かすことが必要です。それにより、技術の幅に広がりが出てくると思います。また、色々なことに挑戦し、物怖じせず、とりあえずやってみるという姿勢が技術を覚える上で大切だと思います。

新しいことに挑戦する際大切なことは？

すべての技術を一人の人間が持つことはできないので、いかに人に頼るかということも大切だと思います。専門の分野の人と繋がりを持ち、この人ならばやってくれる

といったことが大切だと思います。私自身、入社以来、多くの人に助けてもらいました。

日本技術士会の原子力・放射線部会の人たちとも、警戒区域の町の復興ビジョンづくりを支援したり、地域で野菜の放射線量を測定したり、地区集会場で酒を酌み交し議論したり、被災地の人たちに直接接したことも大切な時間と考えています。形式的な地元説明会だけだと、どうしても声の大きな人の意見しかでないことがあります。これらの経験は、現在の石巻市での復興事業における地元調整でも役に立っていると思います。

今後、挑戦していきたいことは？

現在の担当している復興業務においては、情報を共有する仕組みが大切だと思っています。石巻市の半島部では 10 戸未満の造成団地が多く、46 地区 67 箇所の高台移転を効率良く進めるための情報共有システムと箇所カルテを構築しました。市、コンサルタント、ゼネコンの 3 者で情報を共有する仕組みとして、CIM-LINK というシステムの活用を提案しました。これにより、工事工程、進捗状況、3D による視覚化資料等の情報が 1 月に 1 回更新され共有できる仕組みになっています。

今後は市街地の復興事業において、土地区画整理事業や堤防整備、道路整備等の事業者間調整に CIM-LINK を活用したいと

思います。また、CIM-LINK の情報をストックすることで、将来の維持管理に活用したいと思います。

生涯を通して輝き続けるために

若いときにやっておいた方が良いことは？

語学力や論文の書き方といったスキルは若いうちに身に付けた方がいいと思います。また、一つの業務から知識や技術を広げていくことも大切なので、私は、仕事の時に調べたことや、新聞記事のデータなどを普段から収集していました。思いもよらないところで繋がり、役に立つことがあります。

シビルエンジニアが働く上での障害は？

年を重ねると、発想の柔軟性が欠けてくることがあります。自分に自信があることは良いことですが、技術者だと強く主張しすぎるとうまく行かない場合もあると思います。また、受け入れ側もそういう年齢だからとか、そういう人だからと遠慮せず、コミュニケーションを活性化することが大切だと思います。

退職について、どうお考えですか？

現場の仕事が好きなので、健康でお酒が飲めるうちは続けていきたいと思っています。定年はないと思って仕事を続けています。仕事ではなくてもこれをやりたいというものを見つけて、それをやるのが大切だと思います。

(文責:渡辺 泰孝)

インタビューを終えて (聞き手から)

大元さんは、人とのつながりをとても大切にされる方だと思いました。また、業務についても柔軟な発想を持っており、震災復興に向けて挑戦し続ける強い意志を感じました。一方で、人とのつながりや挑戦することをとても楽しんでいるようにも感じました。技術者としての業務に取り組む姿勢や考え方など、大変勉強となるインタビューでした。